
変わりゆく心

クノウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わりゆく心

【Nコード】

N1309A

【作者名】

クノウ

【あらすじ】

最終兵器彼女のちせとアケミのストーリー。

あれはいつだっただろう……

初めて会ったのは幼稚園の頃？でも、よく覚えてない。

覚えているのは、小学校の高学年の頃

最初はアケミがよく口げんかしている“ちょっと怖い男の子”。それだけだったんだ。

初めて話したときのこと覚えてるかな？

あの時のこと……

アケミを待ってて一人でいたところに、突然話しかけられちゃってとてもドキドキしたんだ。

「よかった、まだいたんだな。アケミのことでも待ってたの？」

だって、いつもムスツとした顔してるから、何か怖い事言われるのかな？とか、怒られちゃうのかな？

なんて思っちゃったんだ。ごめんね。

そうしてわたしが返事に戸惑っていると

「これ、君のだろ。昇降口に落ちてたんだ。」

そう言っただけで出された手には、わたしの学生証。

「あ、ありがとうございます。」

でも、本当はわたしの落とし物を届けてくれただけだったんだよね。わたし、アケミとケンカしてるときのシュウ君しか知らないから、優しくされてとても嬉しかったんだ。

何よりも、話したことも無いわたしのことを知ってくれたことが……

「おっ、おい！どうしたんだよ。どっか痛いのか？」 「えっ？」

わたしは知らない間にほんの少しだけ、涙を流していた。

それからかな？なんとなくアケミが“羨ましい”と感じるようにな

ったのは。

男の子と平気でしゃべれるし、ケンカするし、運動神経もいいし、わたしなんかよりも魅力的で、勝てるどころなんか無いなあってガツクリしちゃったんだ。

気付いたのは中学校

部活でアケミが走ってるのを見てみると、いつの間にかわたしの視界に入っているのは、いつも シュウジ君だった。知らない間にシュウジ君を目で追いかけてた。

「ちせ、お待たせ。」 「ひゃあっ!!」

当然声をかけられて、変な声上げちゃった。

「うわ! なによちせ、変な声出しちゃって。ボーっとして考え事でもしてた?」

着替えを終えたアケミだった

「ご、ごめんねアケミ。ちょっとグランドのほう見てたから……」

「グランド? なんかも面白いものもあるの。」

グランドでは、陸上部や他の部活も片づけをしているだけで、見ていても面白くない。

でも、グランドの端のほうに一つ。夕日に照らされて顔は良く見えないが影が動いているのが見える

「ああ、まくだあいつ走ってるんだ。チームに選ばれたからか、随分張り切ってるね。」

なに、もしかしてあいつのこと見てたの?」

「え!?!? ちちちち違うよ!! わたしは……べつに… シュウジ君のことなんか……」

「あれ? わたしがいつ『シュウジを見てた』なんて言ったの?」

「ええ!」 うう、アケミに騙された……

「そうか」 ちせはアイツのことが好きだったのか。どう、告白とかしないの?」

「だから違うつて」

「はいはい、それにしてもあんな奴の何処がいいのさ？口は悪いし、無愛想だし、頭は悪くないけど 走る事しか能の無いような奴だよ？ほんと…あたしだったら彼氏になんかしたくないべさ。」

「ううう」

……………

そして中学三年の夏。中学最後の大会。
このとき気付いたんだ。

アケミの応援に来ていたわたしは、喉が渴いて一人でジュースを買いに行った。

「やっと見つけた。」

なかなか見つからなかった自動販売機を見つけ、わたしは駆け出した。それがいけなかった

『ドンッ』『きゃっ！』『うわっ』『ご、ごめんなさい。わたし、

よく前を見てな……くて…』

ぶつかったのがシュウジ君だったんだ。

「ああ、君か。べつにいいよ、痛くもなかったし。」

「そうですか……」

（わ、わたし何やってるんだろう。もっと何か話とかしないと…、
そうだ『長距離走頑張つて』って いわないと…、せつかく応援に来たんだもん。）

「あ、あの」「あ、君もジュース飲む？」（へ？）

「アケミたちに、買いに行くならついでに買ってこいって言われてさ。」

「い、いいんですか？」

「ああ、先生からお金も貰ったし一人分くらい増えても構いやしないから。」

「は、はい。あの……」「なに？」
「わたしも少し持ちましょうか？」

「それにしても、こんなに頼んどいて一人に買いに行かせるなんて、ひどい奴らだな。」

「あ、そうですね。」突然話しかけられて、胸がどきどきする。

「だいたい、アケミがみんなのも買って来いとか言うからだべ。」

「アケミが言ったんですか……」

「ああ、あいつは昔からあんな奴だからな。ま、オレもそうだけど、君もよくアケミとは長く付き合ってるよな。」

「そうですね。」

「アイツももっと大人しくすればいい奴なのに、ああもがさつだとはんと参っちまうべ。」

「ふふ、そうですね」こんなに話せたのは初めてだった。自然と話も弾む。

「やっと笑ってくれたな。」「え？」

「あ、いや……俺と話すとき、いつも緊張してるみたいだったからさ。初めて見たよ、君が笑ったところ。」

いつも？話をしたといっても、今まで話したのはほんの4、5回のはず。それも、ちょっとすれ違いざまに話す程度だった。

なのに、いつもわたしのこと見て話してくれて覚えていてくれた。とっても嬉しい……

「あの……」「え？」

「アケミも、けっこう女の子っぽいところあるんですよ。」

「えー！アイツにか？」

「はい、けっこう可愛いものが好きだったり、お菓子とか作るのうまかったり。」

「へーあいつがねー、人は見かけによらないもんだべ。」

しばらく会話が途切れた

「あ、あの…」 「ん？なに。」 「あの、頑張ってください。わたし、お、応援してますから。」

「ああ、頑張るよ。」

「……」 「……」

「ありがと。」 「え？」

「やっぱ最後だと思うと緊張しちゃってさ、ずっと落ち着かなかつたんだ。」

「そうでなんですか。」

「なんだか気が楽になったよ、ありがと。」

そういった彼の顔は、いつもの仏頂面ではなく、どこか優しい顔つきだった

そして2人でみんなのいる控え室に向かった。

「ああ、シュウジおかえり。あれ、ちせ？どうしたの。」

「あ、アケミ。これ……」 そういつてジュースを差し出した。

「ああ、ありがと。な～に？もしかしてシュウジの買出しに付き添ってたの？」

「う、うん…」 「たく、あいつもか弱い女の子に手伝わせるとは……」

「違うの、アケミ。わたしが持つの大変そうだったから、4、5本持っただけだから」

「じゃあ、自分から声をかけたの？」 「そ、それは……」

「うーん、じゃあなんか進展あったの？」 「進展？」

どうなんだろう。進展といわれてもべつにわたしは彼の事を好きでも何でも……

そのとき、頭に先ほどの光景がよぎった。『ありがと。』 そういったときの彼の顔

顔が熱くなる。心臓もドキドキする。

（ああ、そうなんだ。やっぱりわたし…）

「あのね、アケミ。」 「うん」

「わたし、やっぱりシュウジ君のことが好きみたい。」

わたしは、シュウジ君に恋してるんだって。

—終わり—

（後書き）

久しぶりにSS書きました。なんだか制作意欲がわかなかったので、随分書いてませんでした。

書き始めたら早いものではぼ2時間くらいか……時間が過ぎるのが早く感じます。

今回迷ったのは、シュウジが昔の“ちせ”のことをどう呼んでいたか。名字がないから無難に『ちせさん』か『ちせちゃん』かな？皆さんの意見を募ります。

そういえば北海道弁、うまく使えてるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1309a/>

変わりゆく心

2010年10月11日18時49分発行